

自然環境との調和・地域との融合

京都大学は吉田、宇治の二つのキャンパスに加えて2003（平成15）年、大学院工学研究科と情報学研究科の教育拠点として、桂キャンパスを桂坂の御陵坂に開校しました。

桂キャンパスの敷地の広さは桂坂小学校の約14倍あり、A～Dの4つのクラスターで完成します。教・職員数500名 学生数1500名（平成21年現在）です。（Dクラスターが完成すると教職員600名、学生2,500名になる予定）ここは大学院生の施設のために、学部生は4回生のみ専門の研究をするために通っています。こうした理由から、地域の皆さんはよくご存知のように、キャンパス全体は学部中心の大学から見ると落ちついた雰囲気、研究棟の部屋の灯りは夜遅くまでついています。

- Aクラスター 大学院工学科電気系・化学系
- Bクラスター 本部・共通施設
- Cクラスター 大学院工学研究科地球系・建築系・物理系（平成24年11月移転予定）
- Dクラスター 大学院情報学研究科（未着工）

桂キャンパスの移転当時、京都大学総長補佐であった大学院工学研究科の西本清一教授は、その基本理念とされるものについて以下のように述べておられます。

21世紀初頭に開校する桂キャンパスは、かけがえない地域環境を保持しつつ調和ある人類社会の持続的発展に必要な新しい科学技術を創出し、社会に貢献できる教育研究の実践フィールドでありたいと願っています。

また、桂キャンパスの基本理念として、地域社会との融合を謳っており、御陵桂坂に展開するキャンパス空間が新たなコミュニティを形成し育成する場となることを目指しています。

（「京都大学桂キャンパス開校に際して」広報『桂坂』97号より）

京都大学散策マップ Kyoto University 京都大学桂キャンパス

桂モニュメント

桂キャンパスのシンボルタワー、21世紀初頭の先幅2m、高さ31m、鋼と同じ強度のプレキャストコンクリート文字盤は吉田キャンパスの時計台と同じデザイン。縦長の4面ディスプレイは、青・赤・緑の発光ダイオード

桂インテックセンター

多様な分野の研究者が結集し、工学を基盤とする応用研究課題に取り組む先端学術研究拠点

船井哲良記念講堂

京都大学で最大規模の500席の講堂ホールや大小の会議室を有する。京都大学出身のノーベル賞フィールズ賞受賞者の展示がある

プロムナード

異なる分野の研究者が出会うクラスター間をつなぐ弓形の通路

エネルギー管理センター

桂キャンパスの電気・ガス・水道等エネルギーと施設セキュリティの管理を行っている



クラスターとは？

キャンパスの散策マップからお分かりのように、最大70mの高低差を利用して設置された、大きくカーブを描く遊歩道（ヒルトップ・プロムナード）が、御陵坂の斜面に散りばめられたように研究棟の建つA、B、Cの3ブロックを貫通しています。これらはまるで葡萄の房と茎のようです。「クラスター」とは葡萄の房を意味しており、各区画が「Aクラスター、Bクラスター」と名づけられた理由はここにあります。バスの車窓などから見える、各クラスターの入り口にあるロータリーに沿って置かれた、黒いボール状の物体は葡萄の粒を表しているそ

最先端科学技術を後世に伝える
コンクリート部材を使用

オードで構成されている

大型スクリーン

シンポジウムや公開講座
などの案内に使用される

事務管理棟

Bクラスター

本部機能・共通施設

京大桂キャンパス前

A2棟

A3棟

A4棟

Aクラスター

工学系・化学系

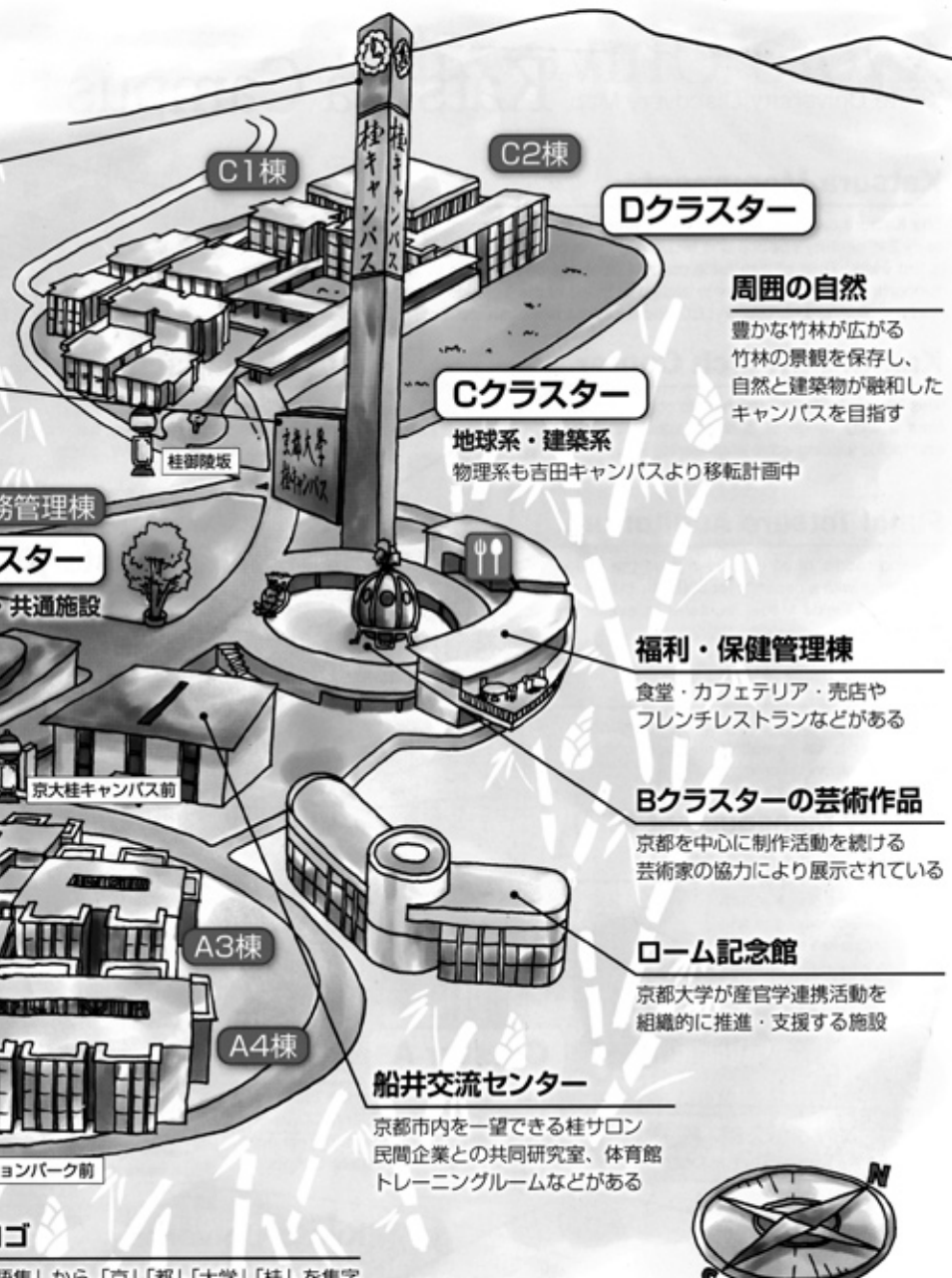
桂イノベーションパーク前

京都大学桂キャンパスのロゴ

京都大学所蔵の国宝鈴鹿本「今昔物語集」から「京」「都」「大学」「桂」を集字

五条通

編集・発行/京都大学 〒606-8501 京都市左京区吉田本町 イラスト担当/京都大学美術部(文化系学生サークル) 2008年8月発行



Dクラスター

周囲の自然

豊かな竹林が広がる
竹林の景観を保存し、
自然と建築物が融和した
キャンパスを目指す

Cクラスター

地球系・建築系

物理系も吉田キャンパスより移転計画中

福利・保健管理棟

食堂・カフェテリア・売店や
フレンチレストランなどがある

Bクラスターの芸術作品

京都を中心に制作活動続ける
芸術家の協力により展示されている

ローム記念館

京都大学が産官学連携活動を
組織的に推進・支援する施設

船井交流センター

京都市内を一望できる桂サロン
民間企業との共同研究室、体育館
トレーニングルームなどがある



うです。

京都市内を展望できるこのヒルトップ・プロムナードは、勝手知った地元の人たちにとっては、五山の送り火の時の人気スポットです。「地域社会との融合」を謳う基本理念のとおり、このプロムナードはクラスターA・B・Cを縦貫し、しかも車椅子でも無理なく往来可能な勾配を保ちながら、緩やかな弧を描いて、近隣公園の御陵公園の横を通ります。私たち地域住民が、開かれたキャンパス内を散策したり、カフェを利用したりすることを想定して作られた、地域との架け橋のような存在です。